

陳舜臣さんを語る会通信

NO.9

May

2020

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2020年5月15日

中国王朝興亡の源流をたどるエッセー集『龍鳳のくに』（2005年 朝日新聞社）

『龍鳳のくに』は次のような構成になっています。

第一部「よみがえる龍」エッセー 9篇

第二部「地上の宝 地下の宝」 6篇

第三部「飛仙図」 10篇

第四部「三裔地」 9篇

第五部「扶桑の秋光」 9篇

陳舜臣さんは、同著「あとがき」で「よみがえる龍」執筆の経緯を次のように書いています。

私は初期の作品『阿片戦争』を書きながら、いつかそれを太平天国や日清戦争から現代に至るまでの、アジアの近代史につなげる夢をもっていた。この夢を追っているうちに、私は中国の歴史をいちどさかのぼってみたいと思うようになった。



歴史好きの人間は仕方がないものである。

こうして『中国の歴史』約六千枚が完成しました。

「よみがえる龍」は六千枚の冒頭にしようと思って、百枚以上書いたが、全体の構想が変わったため、はじめから書き直すことにしたのである。構想の変更は、神話時代や殷周のあたりをもっと詳しく書かねばならぬと考え直したからである。

このため、折角の原稿、「よみがえる龍」は未発表のまま眠っていたのでした。これを、引っ越しの手伝いに来ていた東京の編集者が見つke、『龍鳳のくに』第一部として日の目を見ました。

なお、第二部以下は、かつて新聞や雑誌に発表した文章や、美術展の図録などに寄稿した論文を集めたものです。（編集委員 橘）

龍の爪数から中国との従属関係を推察する —陳舜臣「よみがえる龍」より、思いをめぐらす—

神戸華僑歴史博物館 二宮一郎

《1. 中国伝統の龍 起源を推察する》

2018年1月、神戸市立博物館「ボストン美術館の至宝展」を鑑賞しました。そこで一番眼を惹いたのは、中国伝統の龍の絵画～描いたのは南宋の文人陳容（ちんよう）。解説によれば、陳容《九龍図巻》南宋、1244年 一巻、紙本墨画淡彩。「約10mに及ぶ長大な画面に描かれた九匹の龍。沸き立つ雲と荒れ狂う波のなか、あるいは悠然と飛翔し、あるいは佇むさまを粗放な筆墨で描き出す。作者の陳容は南宋末期に活躍した画家で、特に龍図を得意としたことで知られている」と。

龍とはどのような存在かといえば、“雨を統べる存在でもあり、皇帝の象徴である龍”と紹介されています（東京美術館『ボストン美術館の至宝展』）。当然、龍の起源に関心が集まります。これまた諸説紛々……ここで、あえて引用するのは、陳舜臣氏の歴史民俗学的見解です。

“水のおかげであるていどの農耕活動を知り、それによってゆたかになった部族が、周辺の未開諸部族を自分たちのなかに包みこんだ歴史が、あの龍のすがたにあらわれている。その吸収は、武力の

弾圧でなされたのではあるまい。もし征服であれば、相手部族のトーテムの一部を、自分たちの蛇につけ加えるという面倒な手続きは不必要であろう。…

完全に平和的な吸収であったとまではいわない。しかし、かなりはばのひろい妥協があったはずである。龍は空想の産物であるよりは、妥協と寛容によって、しぜんに生まれたものといったほうがあたっているだろう。…その奇怪な外見にもかかわらず、龍は平和のシンボルなのだ。…

龍はその鱗で漁民、角で狩猟民を暗示しているが、その軀幹はやはり蛇である。水を頼りとした原始的農耕部族を中心として、内部でそれぞれの部族があるていど独立を保ちながら、一つの生活圏をつくった。その原始的国家の国章が、ほかならぬ「龍」であった”（「哀しき龍」『龍鳳のくに』）。次頁へ。



老年の龍が右方の若い龍に教えを授ける 陳容《九龍図巻》

龍の爪数から中国との従属関係を推察する (続)

《1. 中国伝統の龍 起源を推察する》(前頁より続く)

笠間良彦氏の宗教学的的分析によれば“インドの土着蛇神ナーガ(コブラ)は、仏教が流布してからその教えの中に取り込まれ、仏法を護持する龍神・龍王の地位を固めていった。この仏法護持の龍が中国に伝わってから、中国の龍も宗教味を帯びはじめた。道教的な臭いと仏教的な感覚をあわせもち、角と髭と足を持つ中国独自の龍が創造されていくのである。漢の時代に入ると龍はますます神格化し、いろいろな動物のすぐれた部分のみをとり込んで表現されるようになる。「頭は駱駝に、角は鹿に、目は鬼(一説に兎)に、耳は牛に、項(うなじ)は蛇に、腹は蟹(しん)に、鱗は魚に、掌は虎に、爪は鷲に、それぞれ似ている」という三停九似の説をとらえたのは、後漢の学者王符で、これによって中国の龍のイメージが固まった”(『図説 龍とドラゴンの世界』)。

龍の形成を、原始的農耕部族が各部族のトータルを妥協的に付加していった過程であるという評価は、中国古代史に通暁した陳舜臣氏ならではの卓見です。農耕民・漢族に限らず、遊牧民・諸部族もまた、人的交流・交配の面で柔軟性を有していたと考えます。そのことが、東アジアの中心地域たる中国の位置を確固たるものにしました。世界史を見渡して、栄枯盛衰はあるにしても、連綿と文化面経済面での優位性を維持しつつつけた地域は、中国のほかに見当たりません。

古代の中国では龍の爪数について明確に定まっておらず、唐・宋の時代までは三本爪が基本とされま

《2. 龍の爪が象徴する国際関係》

す。元代に入ると五本の爪をもち、頭に二本の角をはやした「五爪二角」だけが本当の龍であると定義されます。延祐元年(1314)には五爪二角の龍文が皇帝専用の文様となり、中国では皇帝以外の者が五本爪の龍を使用することが禁止されます。



明朝嘉靖帝 龍袍

明・清時代になると爪の本数が所有者の地位を意味するようになり、三本爪、四本爪、五本爪が使われます。爪の本数が多いほど地位が高いとされます。王朝のトップを象徴する「五本爪の龍」は、皇帝の衣服・龍袍に縫い込められ、皇帝の権威を強く印象付けてい

ます。

朝鮮においては、四爪龍袍が用いられたのは、李氏朝鮮三代世宗(セジョン)26年(1444)三月に明朝から授かった袞龍袍に始まります。しかし、朝鮮王朝を建国した初代李成桂(イソンゲ)の場合は五本爪でした。三代目より19世紀半ばの25代哲宗(チョルチョン)までは四爪龍袍が用いられました。しかし、清の藩属を脱した1897年、大韓帝国初代皇帝・高宗(コジョン)以後は再び五爪龍が用いられました。

日本においても、格好の画材として、数々の優れた龍が描かれてきました。ただし、爪は3本に限られています。桃山時代から江戸時代初期の絵師・海北友



朝鮮李成桂は五本爪



海北友松筆 雲龍図(部分) 建仁寺 1599年 三本爪龍

松(かいほうゆうしょう)の龍は、「横目でじろりと見ている目つきには油断がなく、見る人をしてぎょっとさせるものがある。風雲呼んで天に昇る龍ではなく、折あらばと天下をうかがう龍である」(笠間前掲書)と評されますが、私の見立てでは、より庶民的で軽妙洒脱な感じがします。

1609年の薩摩藩による武力侵攻以降、実質的支配を受けていた琉球国王の龍爪は何本か? 大いに関心を惹きます。琉球王国尚家資料目録には「赤繻珍地。単仕立て。白・赤・茶・緑・黄・朱・青などの十三色で、五爪龍(正確には蟒)」とあって、琉球国王の正装の衣装で、中国からの冊封使を迎える際や正月の儀式など、王国の重要な公式行事に着用されました。明清時代から破格の厚遇を受けていた琉球王国...その理由は、明朝の始祖・洪武帝に始まる朝貢貿易など海運に関わる立地条件にあったと類推します。



琉球尚育王の御後絵

『龍鳳のくに』第四部的一篇、「黄瀛（こうえい）さんのこと」

ここでは、陳舜臣さんの『龍鳳のくに』第四部収録の「黄瀛さんのこと」を取り上げます。このことに関連し、1983年2月1日付 関西華僑報の記事、「中国詩人黄瀛の未刊詩集 作家陳舜臣氏が出版快諾！」を掲載いたしました。また、王敏氏の2005年7月18日付朝日新聞のコラム、『黄瀛と「もう一つの祖国」』は、興味深い内容です。王敏氏は、黄瀛氏の四川外語学院での教え子一期生ということです。ネット上、朝日新聞アジアネットワークで閲覧できます。また、黄瀛さんのことは、『道半ば』『進学』にも記述があります。（編集委員 橘雄三）

《「黄瀛さんのこと」から引用します》

「黄瀛さんのこと」は、陳舜臣さんが、1992年、初めて黄瀛氏(1906-2005)に会ったときのことを書いた一文です。長くなりますが、黄瀛氏の人物紹介も兼ねて引用します。

神戸在住の詩人竹中郁さんが、よく黄瀛さんのことを噂して、「つらい目に遭ったらしいが、いまどうしているかな」と言っていたのをおぼ



黄瀛氏 1984年 website 毎日頭條より

えている。その黄氏がいま重慶の四川外語学院の教授として、健在であることを私は確認していたのである。会いたがっていた竹中郁さんは今は亡い。私は初対面だが、竹中さんの遺思を継いで黄氏に会おうと思ったのだ。

黄瀛さんの父君は教育者（父君は重慶師範学校長）だったが早く世を去ったので、母上の故郷の日本である時期をすごした。黄氏は若くして日本で詩人と

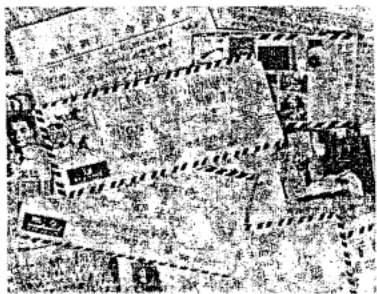
して知られるようになったが、なぜか中国人留学生として日本の陸軍士官学校に入学している。黄氏はい九〇六年生まれであり、ハイティーンのころすでに詩人であったし、士官学校の生徒でもあった。一九二九年（昭和四）士官学校の修学旅行で、奥羽地方へ行ったとき、彼は宮沢賢治を花巻に訪ねている。初対面であったが、どちらも作品で相手を知っていた。ほかに高村光太郎、木下杢太郎、草野心平、竹中郁、井伏鱒二の諸氏と親しく、黄氏は彼らの話をした。「いま残っているのは井伏ぐらいだな」と、彼は淋しそうに言った。その井伏さんも翌年に亡くなったのである。

若き日の黄瀛さんは中国に帰るとき、いつも神戸から船に乗った。そのたびに神戸の竹中邸に泊まったそうである。（中略）

中国にとって日本との戦いは長くつづいた。黄氏は中国の高級士官として抗日戦を戦った。日本の詩をかく中国の将軍は、どんな思いでこの長い歳月をすごしたのだろうか。日本との戦いが終わっても、国民政府軍の将軍である彼は、共産党の軍隊と戦わねばならなかった。戦い敗れて将軍は幽閉される。さらに文革時期は長い獄中生活を送った。

重い人生を生きた方です。

友人の故竹中郁氏宛に送られて来た手紙



友人の故竹中郁氏宛に送られて来た手紙

友人の故竹中郁氏宛に送られて来た手紙

友人の故竹中郁氏宛に送られて来た手紙

友人の故竹中郁氏宛に送られて来た手紙

友人の故竹中郁氏宛に送られて来た手紙

中国詩人黄瀛の未刊詩集

によれば、母親は日本人で千葉県の出身だったという。昭和の初め、日本に留学し陸軍士官学校を卒業。その頃草野心平ら

の同人詩誌「銅」として知られるようになった。昭和の初め、日本に留学し陸軍士官学校を卒業。その頃草野心平ら

作家 陳舜臣氏が出版快諾！

この詩集が陳さんに届けられた陰には、昨年逝去した神戸の詩人・竹中郁さんから戦前から黄瀛さんを知る詩人たちの熱い友情があった。陳さんはこの竹中さんと黄瀛さんの半世紀に及ぶ厚い友情にうたれて、詩集の出版を引きうけた。

黄瀛さんは一九〇六年、四川省の重慶生まれ。今年77歳。詩人の草野心平さん

の詩集が陳さんに届けられた陰には、昨年逝去した神戸の詩人・竹中郁さんから戦前から黄瀛さんを知る詩人たちの熱い友情があった。陳さんはこの竹中さんと黄瀛さんの半世紀に及ぶ厚い友情にうたれて、詩集の出版を引きうけた。



「毎年夏休みに帰省するときには必ず竹中さんの自宅を訪ねた。神戸は故国への一步をふみ出す所だった。上筒井と一緒に歩いた。君の家の2階で飲んだソーダ水の味が忘れられない」竹中さんのもう一人の黄瀛さんとの友情には何んでもあった。衣類を送り、書籍を送り、詩人たちの連絡役を努めた。

と話している。

陳舜臣さん思い入れの二人、黄遵憲(こう じゅんけん 1848-1905)と劉鉄雲(1857-1909)

陳舜臣さんは、『中国傑物伝』、『巷談 中国近代英傑列伝』、『中国近代の群像』など、人物評伝がお好きです。更にあげると、『中国詩人伝』、『中国画家伝』、『中国任侠伝』から『中国畸人伝』まであります。ここでは、『巷談 中国近代英傑列伝』に登場する二人の人物、黄遵憲と劉鉄雲を取り上げます。この二人に、接点はありません。強いて言えば、二人とも、第8号で扱った『青山一髪』に登場する、ただそれだけです。(編集委員 橘雄三)

『巷談 中国近代英傑列伝』		
第一章	近代の幕開け	
	阿片戦争の英雄	林則徐
	諸葛孔明たらんとした	左宗棠
	衰退王朝を支えた	李鴻章
	最初の米国留学生	容闕
	大詩人の外交官	黄遵憲
第二章	洋務運動から戊戌変法へ	
	変法百日天下の	康有為
	義挙の人	劉鉄雲
	天性の啓蒙思想家	梁啓超
第三章	革命と反革命と	
	「革命未だ成功せず」国父	孫文
	中国人の「たましい」を革新する	魯迅
	「無我」に徹した	黄興
	「わが中国」に殉死した	王国維
第四章	二人の画人	
	文人画の粹	齊白石
	中国最高の画家	張大千
終章にかえて		
現代に続く心の痛み 台湾二・二八事件		

《1.『青山一髪』での描写 ー黄遵憲ー》

孫文を語るとき、黄遵憲も劉鉄雲も必須の人物ではありません。『青山一髪』にこの二人を登場させていることに、陳舜臣さんの思い入れを感じます。

戊戌の政変後のことです。太字は原文引用箇所。

変法派のもう一人の高官は黄遵憲であった。彼は駐ドイツ公使に擬せられていたが、ドイツのアグレマン（同意）がえられず、湖南の按察使になっていた。光緒帝は彼を救うために、こんどは駐日公使に任命した。『日本国志』の著者に、日本がアグレマンを出さないはずはない。だが、彼は赴任のため上海まで行ったところでかなり重い病気になって、しばらく動けなかったのである。

日本の伊藤博文がちょうど上海に滞在中であった。かれは北京の代理公使林樞助に打電し、日本がすでにアグレマンを出した黄遵憲にたいする処分がおもすぎるなら、日本は抗議を申し入れる意向であると清国政府に伝えさせた。



広東省梅州市、黄遵憲故居
「人境廬」内部の展示
「近代変法先駆」の篇額と胸像

《2.『青山一髪』での描写 ー劉鉄雲ー》

義和団事件のときのことです。

甲骨文字の研究のため、一たん上海に帰っていたが、劉鉄雲はロシア占領区へはいった。そこには「太倉」があったのだ。太倉は政府米穀貯蔵庫である。ロシア軍は米などは食べないのでそのまま置いていた。北京は飢えていた。劉鉄雲は義気の人である。ロシアから安く買った米を、北京市民に安く放出したのである。だが、これはあくまで公米であり、八年後、鉄雲は公米私売の罪で新疆に流されたのである。



江蘇省淮安市、劉鶚(がく)故居

1903年夏、横浜。中国からの留学生や清国の官憲ににらまれていた人たちが集まった場での会話です。

「江蘇ならわしよりも鉄雲だよ」

烏目山僧の黄宗仰は言った。

鉄雲とは江蘇鎮江出身の文学者劉鶚の号である。

彼の小説『老殘遊記』は、やっとこの年に連載がはじまったばかりだが、同郷の文人のあいだでは、彼の文名はかなり知られていた。中国で最初の本格的近代小説家として、のちに日本の二葉亭四迷とくらべられる人物であった。

なお、この頁の写真2枚は編集委員撮影です。